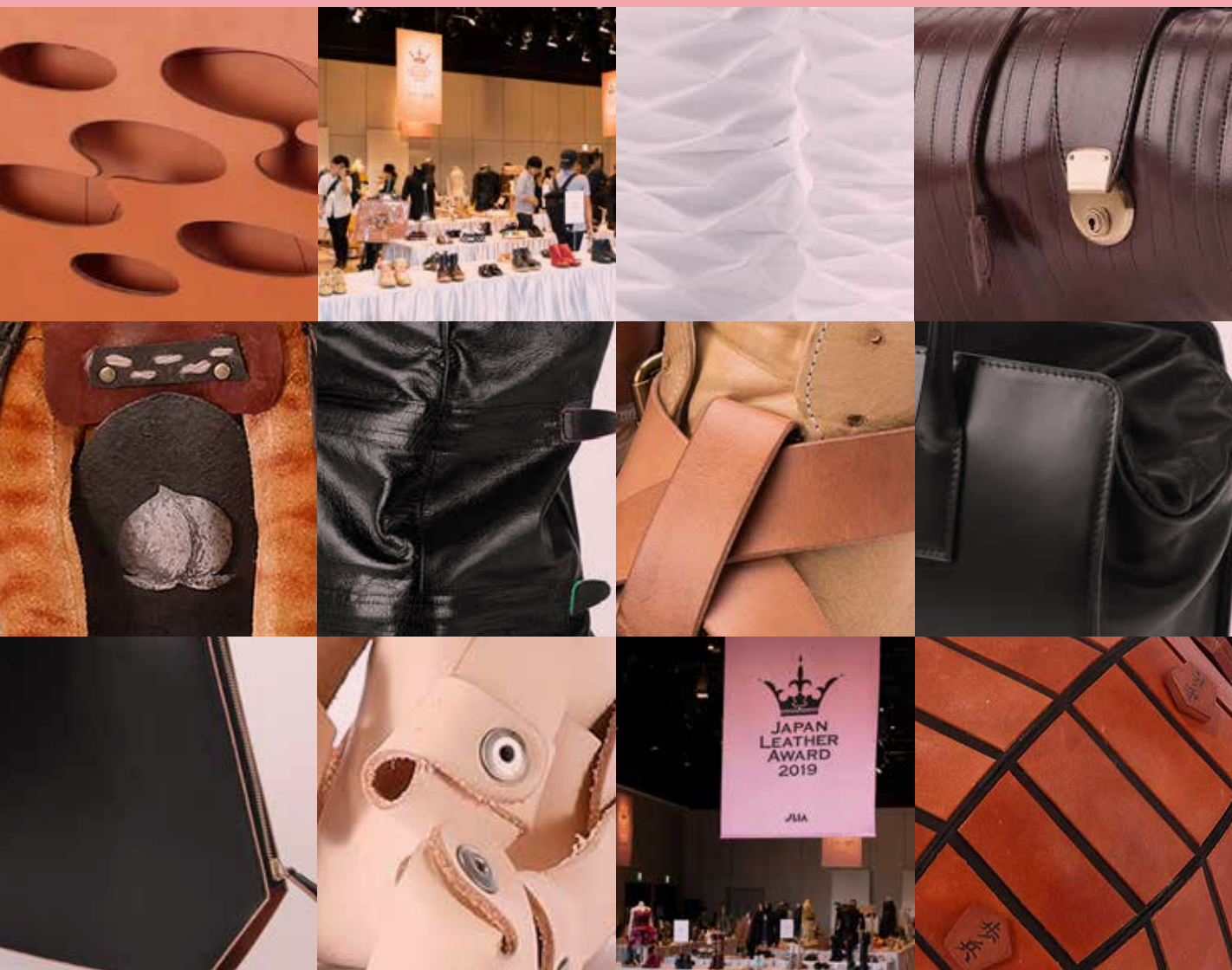
Japan Leather Award 2019



JAPAN LEATHER AWARD 2019

GRAND PRIX

ジャパンレザーアワード 2019

グランプリ

FOOTWEAR

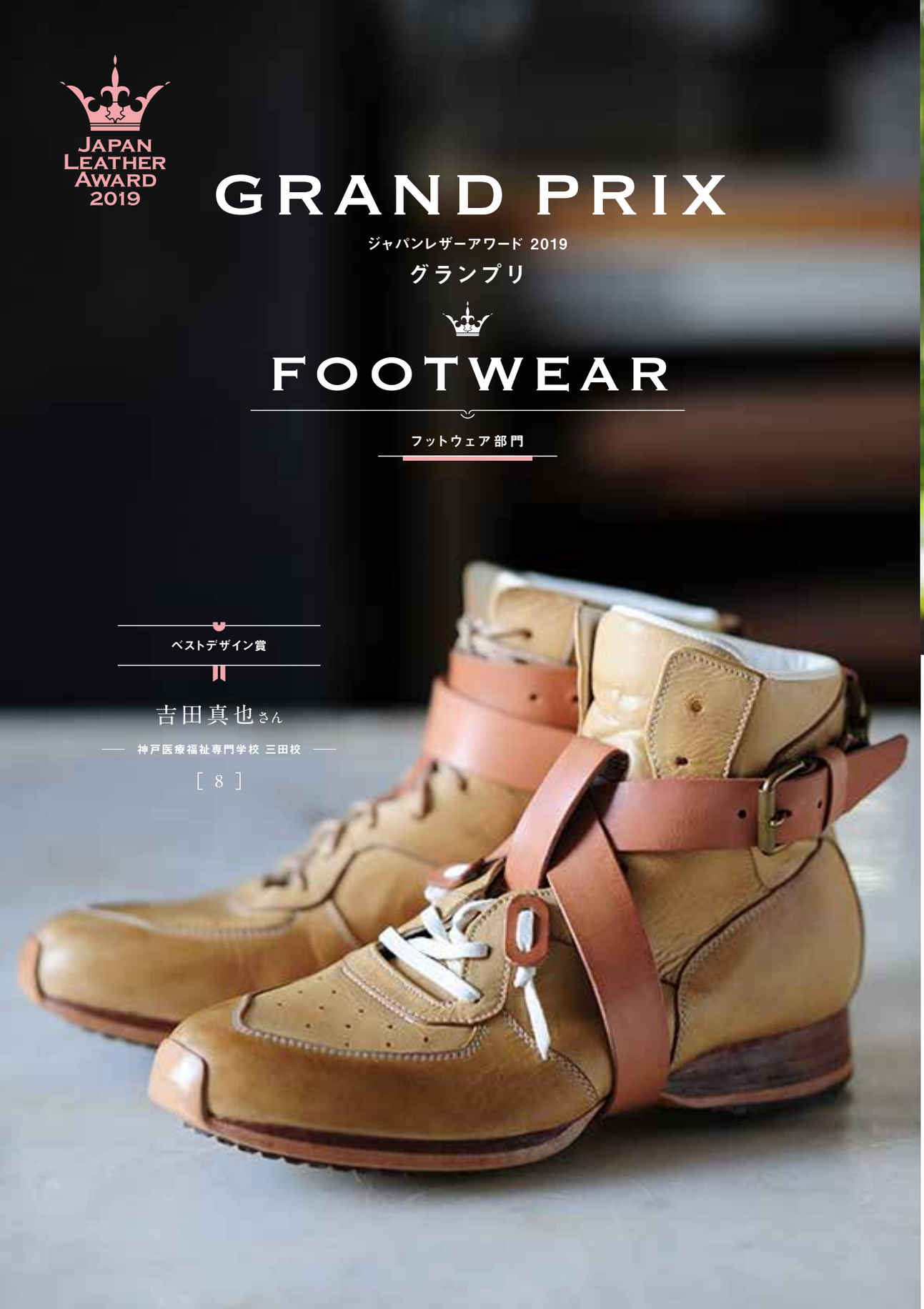
フットウェア部門

ベストデザイン賞

吉田真也さん

神戸医療福祉専門学校 三田校

[8]



爽やかな笑顔の吉田さん。32歳とまだ若く、神戸医療福祉専門学校三田校の学生にも慕われている

医療的な観点も考慮した ユニバーサルデザインの靴

兵庫県南東部に位置し、北に六甲山地を擁する三田市。『ジャパンレザーアワード 2019』でグランプリを受賞した吉田真也さんは、この街にある神戸医療福祉専門学校三田校で教員として働き、余暇を利用して靴づくりに取り組んでいる。現在は整形靴科の授業を受け持っているが、そもそも吉田さんは同校の義肢装具士科の卒業生でもある。

「僕は中高生のときにバレーボールをしていたのですが、よくケガをしていまして。病院で義肢装具士さんと接する機会があったことから興味を持ち、義肢装具士科へ進学しました」

卒業後は大阪の義肢装具製作会社に入社。ここで、思わぬ壁が立ちはだかる。義肢装具士科では義手・義足をはじめとする義肢および全身の装具について万遍なく学んだが、義肢装具士養成カリキュラムの中では靴に関して勉強する時間が限られているため、靴への知識は

ユニバーサルデザインをコンセプトに制作したというグランプリ受賞作。性別や障害の有無などを問わず、誰にとっても履き心地の良い一足に仕上げている

プライベートなプロダクトの制作は自宅で行うが、職場である学校も靴づくりの環境が整っている。吉田さんはここで、医療的な観点に基づいた整形靴の制作を指導している

リン酸なめしの鹿革を使い理想的な履き心地を実現

少ない状態だった。そのため、靴型装具の注文があってもうまく対応できず、「もっと靴について勉強したいと思うようになりました」。その後、吉田さんは5年間勤務した会社を辞め、あらためて同校の整形靴専攻科に入学。しかし、それでも学び足りないという思いが強く、京都の靴工房で3年間にわたり修業を積む。そして、縁あって母校の整形靴科で後輩を指導することとなった。

仕事と並行して、プライベートで靴づくりをしていた吉田さん。彼の言葉で言うと、制作は“ライフワーク”。『ジャパンレザーアワード』への応募は、今回で5回目を数える。

「人に頼まれて制作する靴は無難なデザインになりがちなので、年1回の『レザーアワード』は、変わったデザインの靴をつくるのに絶好の機会と捉えていました。5回目の応募でのグランプリ受賞は、ようやくという感じです（笑）。学生たちの刺激になればうれしいですね」

受賞作品は、ユニバーサルデザインをコンセプトにした「8（エイト）」。害獣として駆除された鹿の革を使用している。ライニングおよびインソールには、リン酸系のなめし剤を使った革を使っているため、やわらかく履き心地も抜群だ。取り外し可能なストラップの存在もこの靴の大きな特徴で、テーピングのように巻くことで足首を固定させるほかに、装飾としても機能する。ナチュラルな色味なので、エイジングも楽しめそうだ。

「この靴は、整形靴の技術をベースにつくりました。ストラップの位置に関しても、解剖・運動学的なことを考慮し、足の動きに対して機能的に働くよう設定しています」

そもそもこの作品は、学生時代からの友人への結婚祝いとして制作したそう。「自分のためのものづくりはどうしても手を抜いてしまいがちですが、誰かのためにつくるとなると妥協できませんし、モチベーションも上がりますね」と、制作時の心境を語ってくれた。

グランプリ受賞という夢をついに叶え、当面の目標こそ終えてしまった。しかし、吉田さんは今後もライフワークの靴づくりを続けていくつもりだと話す。

「日本では靴に対する正しい知識が周知されていないので、足のトラブルを訴える人は今後も増えていくはずです。仕事で学生に整形靴のつくり方を指導しつつ、僕個人としても、医療的な観点に配慮した履き心地の良い靴を追求していきたいですね」

作品名の「8（エイト）」は、足首を固定させるテーピングの巻き方「フィギュアエイト」に由来。写真のように足の底から足首にかけて巻くことで足を安定させられる

BAG

バッグ部門

ベストデザイン賞

井戸田和之さん

株式会社 村瀬鞄行

［ HideRU（ひでる） ］

ランドセルが持つシルエットの美しさや背負いやすさは生かしながら、手縫いやひだ寄せといったハンドメイドの技術や、生きた革を使うことを大切にし、時が経つことも楽しいと感じさせてくれる鞄へと昇華させた。かぶせに施された穴が光を通すことで、使うほどに前ポケットへ描かれた牛の模様がより濃く浮かび上がってくる。

ベストデザイン賞

村林麗子さん

株式会社 吉田

［ ドローストリングハンドバッグ ］

フォーマルなハンドバッグのイメージはそのままに、口開きが広く物の出し入れが容易な仕上がり。外側には厚みと張りのある革を使ってしっかりと荷物を支え、内側にはやわらかく手触りが良いラム革を使うことで、口が広げやすく、絞れば中の物が見えなくなる工夫もされている。革鞄は重く普段使いしづらいと感じている人にこそ手にしていただきたい。

フューチャーデザイン賞

矢内 徹さん

株式会社 吉田

［ ビッグクロシェットバッグ ］

クロシェット型キーホルダーをビッグサイズに落とし込んだバッグ。肉厚のサドルレザーの外装が、やわらかなシープスキンの巾着型の内装を覆う構造。自立させることもでき、雨や汚れから守ってくれる外装と、8つものポケットを備えている内装は取り外せるので、カジュアルシーンでは内装の巾着だけで使うことも可能だ。

フューチャーデザイン賞

小林 剛さん

株式会社 吉田

［ ネオンレインボーザック ］

防水性能を持たせたやわらかな革を使い、機能的に仕上げられたマウンテンバックパック。4つの気室にアクセスするファスナーの引き手と止めのコバに施されたネオンカラーが視認性を高めつつ、良いアクセントになっている。通気性と背中の保護を担う背面パッドも備えており、一見シンプルながら、そこかしこに使い手への細やかな配慮であふれている。

FOOTWEAR

フットウェア部門

フューチャーデザイン賞

生駒朋彦さん

カワノ 株式会社

[Transformation]

レザー表面へ均一に施されたダイア状のパターンは、装飾としても美しいだけでなく、折りたたまれ、広がることによって、あらゆる足の形に合わせて変形できる靴。快適な履き心地はもちろん、脱ぎ履きや歩くことで変化する靴の表情も魅力的だ。作品名にもあるように、変化する靴の造形によって、履く人の気持ちも変わることだろう。

FREE

フリー部門

ベストデザイン賞

坂﨑 匠さん

Arti

[Leather Doll]

皮革をさらに身近にしようというコンセプトでつくられた天然皮革の人形。しなやかさややわらかさ、あたたかさを感じる風合いを生かすために、接着や縫製はせず、厚みのあるヌメ革を切り込みやビス留めで仕上げている。このような革の魅力を味わえる人形が、本棚や棚の隙間などにちょこんと腰掛けていたら、老若男女を問わず笑顔にさせることだろう。

STUDENTS

学生部門

最優秀賞

藤田れなさん

兵庫県立姫路工業
高等学校 デザイン科

[桃太郎について行きたかった猫]

親から子へと語り継がれる昔話に猫が登場する機会がないことから生まれた、桃太郎について行きたかった猫の人形。「ネコもそういうメジャーな話に出演しないといけないと焦っていた」と話す作者。深い思いから生まれたユーモアと物語性あふれる作品コンセプトを、猫の表情や鎧など細かなつくり込みで表現している。

最優秀賞

王 廷佳さん

学校法人文化学園
文化服装学院

[SANAGI]

冬の枯れ枝にしがみつき羽化に備える蛹（さなぎ）がもつ落ち着いた印象や色合いをイメージ。アシンメトリーの造形ながら奇をてらった印象はなく、むしろ現代の都市の風景によく馴染む。胴面には蛹の模様や形から着想を得たストライプと丸みを帯びた形に。四角張った書類やパソコンではなく、遊び心を持ち運ぶ。そんな豊かな気持ちにしてくれる。

SPECIAL

フリー部門

特別賞

中山智介さん

銀職庵水主

[天球将棋（テンキュウショウギ）]

将棋盤の9×9マスを球体へ構築した作品。誰もが遊んだことがある平面の盤の左右がつながることで、駒の動きがどう変わるのか、一度触れてみたくなるだろう。ベジタブルタンニンなめしの牛革を使い、積革の技法を応用して構成。飾り金具に用いた真鍮無垢材とともに将棋盤と駒がどう美しく経年変化していくのかも楽しみたい。

JURY'S SPECIAL AWARD

審査員賞

長濱雅彦選

西尾 陽さん
— 株式会社 リーガルコーポレーション

[Sustainable Shoes]

SDGs（持続可能な開発目標）に即して、ジェンダーフリー、クロムフリーをテーマにした靴。植物由来のタンニンなめし革を使い、シンプルで誰もが楽しめるデザインだ。

伊藤 瞳選

宇佐美清香さん
— 兵庫県立姫路工業高等学校 デザイン科

[Little Memory]

幼いころ、日暮れ時の遊園地で見たメリーゴーランドのきらめきを表現。今も心に残る闇夜に輝く白馬や、レースリボンと星の輝きは、大人の世界への憧れを感じさせる。

佐藤直人選

前田七虹さん
— 兵庫県立姫路工業高等学校 デザイン科

[ビアジョッキー]

ビールがなみなみと注がれたジョッキのようなバッグ。視覚に訴えるこのバッグを持つことで、ビール好きなシニアのコミュニケーションを円滑にすることを目指している。

矢口真弓選

小礒 晃さん
— 個人

[stitch work tote bag]

ハンドステッチとミシン、両方の良さを生かしながら、刺し子から着想を得た柄や立体感を表現。軽量ながら自立する仕立てや、肩がけハンドルなど機能面も充実している。

阿部 浩選

細田公一さん
— 個人

[Glauca]

気仙沼で獲れ、なめされた鮫革でつくられたマウンテンブーツ。縦横に走る深い網目状の皺から無骨で硬いイメージを醸すが、実際は柔軟性に優れ、耐水性も備えている。

有働幸司選

一瀬美月さん
— 個人

[Transparent Bucket Bag]

豚の生皮がもつ半透明でステンドグラスのような風合いを生かしたシックなバッグ。シボや毛穴など、動物の持つ美しさも残しながら、バランスよくまとめられている。

橋本太一郎選

川嶋望愛さん
— 兵庫県立姫路工業高等学校 デザイン科

[Bio]

異なる型押しの革を有機的に組み合わせたバッグ。皮革の経年変化を生命の再生であり、有機的個性であるとし、多様な部位の集合である有機体（生命）を表現している。

吉田けえな選

小田涼二さん
— 個人

[PERFUME]

きらめきゆれる様子を表す“赫う（かがよう）”をコンセプトにデザイン。ショルダーバッグ時に飾りとなるアクリルパーツは、ショルダー部を外せば持ち手にも。

天津 憂選

小山泰雅さん
— 学校法人水野学園 ヒコ・みづのジュエリーカレッジ

[stratum]

地層が生み出す絶景の地として知られるアメリカのザ・ウェーブに着想を得てつくられた。重ねた革を削り出して、地層のような美しい曲線を浮かび上がらせている。

鎌倉泰子選

後藤優太さん
— 個人

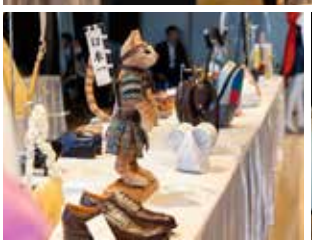
[Rounder（ラウンダー）]

底部の角が傷みやすいという課題に応えるべく、ウェットフォーミング技法を用いて革一枚から底部の角をなくした。両端が逆台形に広がらないよう緻密に仕上げられている。

審査員賞とは

各審査員が、受賞作品10点以外で注目した作品を1点ずつ選出した賞で、表彰状が贈られるほか、表彰式でも一般公開される。

会場には、全国から300を超える作品が一堂に会した



日本最大のレザープロダクトコンペティション

天然皮革を生かしたプロダクトの優秀作品を選出するジャパンレザーアワードが今年で12年目を迎え、10月4日～5日にiTSCOM STUDIO & HALL二子玉川ライズで審査会が行われた。全302作品を一般公開するとともに、長濱雅彦審査員長をはじめ、デザイナーなどで構成された審査員10名の審査と協議により受賞作品を選出。審査後に行われた作品応募者、審査員、皮革業界関係者のコミュニケーションを目的とした交流会も盛況のうちに終わり、次のトレンドを生み出す絶好の機会となった。

Japan Leather Award 2019 **http://award.jlia.or.jp/2019/**

一般社団法人 日本皮革産業連合会（JLIA）
JAPAN LEATHER AND LEATHER GOODS INDUSTRIES ASSOCIATION

www.jlia.or.jp